協同学習（「学びの共同体」づくり）による授業・学校改革の試み

根岸　恒雄
熊谷市立大幡中学校

1. はじめに

私は英語の教師ですが、私が協同学習に取り組むようになって3年半が過ぎました。一斉授業とペア、グループ学習を組み合わせて授業を行うことで、より多くの生徒を学びに参加させられますし、グループで力を合わせることにより高度な課題にも挑戦させられるようになります。結果として生徒の学力も高まっていきます。英語科での協同学習の取り組みを広げ、「学びの共同体」づくりの取り組みをより広げたいと考えて、この原稿を受けさせてもらいました。この原稿の元は、「教育のつどい」の報告書です。A4で46ページだったものを約4ページに凝縮して書かせて頂きます。

2. 「学びの共同体」づくりの協同学習とは？

「学びの共同体」づくりは、佐藤学氏（東京大学大学院教授）の論文「新しい公共圏の創出へ」（1999年）によると、次のことが言えます。

◎学校の再生とは、「民主主義」の再生であり、「教養（の伝承）」の再生であり、「共同体」の再生である。
◎21世紀を「共生する社会」ととらえ、人と人を連帯させる「教養」を保障する方法が協同学習である。当然「質の高い」学びが求められる。
◎「学びの共同体」としての学校は、教養を保障する授業の創造、教師間における「同僚性の構築」、親と市民によるネットワークの創造、地方教育行政における学校の援助システムの構築（官僚主義の克服）によって具体化される。

「学びの共同体」づくりに基づく協同学習は上記のような背景を持っているという意味で、他の協同学習と区別されるべきだと考えています。＊もっと関心を持ってほしい。とてもよくできたシステムである。

3. 協同学習の意義と要点

この協同学習の意義と要点を簡潔に書いてみます。

1　他者との交わりをしながら、認識や感覚を広げていく「活動的で協同的で表現的な学び」を構築する必要がある。

2　グループ学習の良さは、友達と意見交流できるだけでなく、基礎学力を引き上げることが可能だということだ。相互の依存し合える関係を作ることは、高学力層の子は自分の知識をより確かにすることになり、低学力層の子は学ぶことをあきらめなくなるという相乗効果を期待できる。

3　グループ学習には、「個人学習の共同化」と「背伸びとジャンプのための協同的な学び」の2つの機会がある。

4　グループ学習は学びが成立している限りにおいて進めるべきであり、学びが成立しなくなる直前で終えるべきである。

5　教師の役割は、グループの学び合いに参加できない生徒へのケア、話し合いや学び合いが起こりにくいグループへの援助である。

男女混合の4人グループの学習を含んだ授業を前提としているわけですが、より詳しくは、佐藤学氏の「学校の挑戦」(小学館)を読まれることをお勧めします。

4. 私の授業での協同学習の取り組み

(1) ペア、グループの組み方

私は現在、教室の座席を基本にして4人グループを編成し班長を互選させています。この方法は教師がペア、グループを組まなくて良いので比較的取り組みやすく、継続した取り組みもしやすいように思います。ペアは横に座っている同士でAペア、前後でBペア、自由な組み合わせでCペアとしています。

(2) グループ学習の取り組み方（概略）

私は一斉授業とペア、グループ学習を組み合わせて授業を行うようにしています。グループ学習の目的は、ア．すべての生徒を学びに参加させること、イ．より質の高い学びを実現することです。

①基本文（文型）の導入、説明は一斉授業で。プリントを使った問題（課題解決）や自己表現は4人グループを作らせ、わからないところは質問させ、ヒントを与えさせたり、教えたりさせます。「2、3番が全員終わったら、班長さん報告して。時間は7分。」等と指示。「終わったら裏に進んでいいよ。質問されたら教えてあげて。」と。10分程度の時間で課題はどの班も終了する場合が多いです。その後、一斉授業の体型に戻らせ、大事な問題（難しい問題）の答えを確認し、必要な説明をしたり、生徒の自己表現を発表してもらったりしています。

②単語と本文の学習でも授業形態は基本的に同じです。単語学習、本文リスニング、はじめのリーディング等は一斉で。プリントを使った部分和訳、読み取り、英問英答、等はグループでやらせる場合が多いです。その後、一斉に戻して大事な問題の答え合わせや説明を行います。音読は一斉でやったり、「グループ合わせ読み」や「一文ずつ回し読み」、ペアでの日本語→英語練習、ペア読みなどの練習を行います。

（3）基本文の学び方の例を関係代名詞ｗｈｏの学習を例にとって書いてみます。

①一斉授業で、Oralで導入します。〝Mr. Okino is a teacher. He lives in Okabe.二つの文を一つにします。Mr. Okino is a teacher who lives in Okabe.〟文を黒板に貼り、その文を使ってwhoの使い方を説明し、別の先生についてもその特徴を表現してみます。その後プリント（資料）を配り、表の1の部分を学びます。

②whoの使い方が理解できたところで、2番の例文を学び、それを参考にして、「友達の良さを紹介する文」を書かせます。個人でやると書けない生徒もいるので、グループを作らせ、わからないところは聞きあいながらやらせます。「個人学習の共同化」です。グループ全員が2～5文書き終わったら班長に報告させます。「わからないところは遠慮なく聞くんだよ。『ここどうするの?』って。一人で考えていても、わからないものはわからないよ。グループの人全員が書けたら班長さん手をあげて。…今日はプリント提出だよ。」などのように働きかけます。

個人でやると全然書けない子も少なくないですが、グループでやらせるとたいてい全員が書けるようになります。

③グループの全員が書き終わったら、班の中で一人ずつ紹介し合い、他の人の紹介を書きとらせます。読むこと、聞くこと、書くことの練習になります。それぞれが表現したことを共有する取り組みでもあります。

④プリント表側の課題の終わったグループや個人は裏側の問題や新出単語の練習をします。課題が終わった生徒たちを遊ばせておくのはもったいないです。単語練習の枠を作っておくと、意欲のある生徒はどんどん練習していきます。

自分に関することや身近なことを新しい文法事項を使って書くことはとても大切な自己表現活動と言えます。授業の最後に班ごとに集めさせ、書かれた文はALTに添削してもらいます。次の時間に返し、正確な文を覚えるよう促します。こうした活動を積み重ねていくと、書くことへの抵抗が無くなっていき、書く力（表現する力）が高まってきます。

ここでは友達の良さを紹介する文を書き（表現し）、発表し合う（共有する）中で、友と自己への信頼を高めることをねらいとしました。

レポートの中では、教科書本文の学習の時のグループ学習、ウォームアップの

P. 7－2　関係代名詞 who の使い方

3年＿＿組＿＿番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1．Mr. Okino is a teacher　He lives in Okabe.

Mr. Okino is a teacher who lives in Okabe.（沖野先生は　　先生です。）

関係代名詞　ｗｈｏ（主格）
① 代名詞ｈｅの代わりにwhoを使い、2つの文をつなげている。
② ｗｈｏより後の部分は、前の名詞（ａ teacher ）を後ろから説明している。このようなｗｈｏを**関係代名詞**という。
③ **関係代名詞ｗｈｏ**は、すぐ前の名詞（**先行詞**という）**が人間の時に使う。**
④ このwhoは、ｗｈｏ以下の文の主語になっている。**主格の関係代名詞**と言う。

Ms. Abe is a teacher who teaches Japanese.

（安部先生は　　先生です。）

Mr. Inoue is a teacher who plays volleyball very well.

（井上先生は　　先生です。）

2．例を参考にして、友達の良さを紹介する文を書こう。（先行詞が単数の時、一般動詞にｓ）

例：Koichi is a student who plays soccer very well.
Yumi is a girl who plays the piano very well.
Tomomi is a girl who is always kind to everyone.
Daiki is a boy who tells a lot of interesting stories.
Nana and Yuko are students who like reading books very much.

（1）クラスの友だち2～5人の良さを紹介。（5分）

（2）班の中で1人ずつ紹介しあい、他の人の紹介を書き取る。（3分）

時のペア学習、英語の歌の導入でのグループ学習等も扱っていますが、ここでは省略せざるをえません。

5. グループ学習についての生徒の評価

2007年度の3年生のアンケートを紹介します。

（1）グループでの学習は効果があると思いますか？
⇩（わりと）効果がある：86％
ほとんど効果がない：2％
（2）グループでの学習は楽しいですか？
⇩（わりと）楽しい：78％
あまり楽しくない：2％

実力テストの市平均等と比較すると、2007年度も2008年度も英語の平均学力は大きく高まったと言えます。

6. 学校全体での協同学習の取り組み

2009年度、私の学校では「学びの共同体」づくりを全校で進めてきました。次が校内研修の方針です。

全ての生徒の学びを保障するため
（1）「学びの共同体」づくり（「協同学習」の推進）に全校で取り組んでいく。
（2）生徒との間では、「学び合い学習」として、取り組みを行っていく。
（3）全教師が年に一度は授業を公開（学年研究授業または全体研究授業）し、全員で研究協議を行う。
（4）授業研究の目的は、①生徒同士の「学び合う関係づくり」、②教師同士の「学び合う関係づくり」（「同僚性」の構築）、③「高いレベルの学びの実現」とする。研究協議は「子どもの参加のしかた」から授業を読み解く形で行う。
（5）外部から講師を招聘し、指導を受け、共に研究を進める。
（6）先進校への視察とその報告を継続的に行い、具体的なイメージをつかんでいく。

年5回の講師を招いての全体研究授業、それがない月は学年研究授業で全員が授業公開し、「子どもの学び」をもとに協議をしてきました。教師同士の学び合う関係も高まってきていて、いろいろな利点が感じられています。管理職も含め、研究推進委員の教師たちは「学びの共同体」づくりを「とても良くできたシステムだ」という確信を深めています。取り組み始めて1年経ちますが、成果として次のようなことが挙げられます。

第1回「学び合い学習」研究授業

1年間の取り組みの成果

上級生になるほど学び合う関係が高まり、学ぶ意欲を高めている。

非行や問題行動が激減している。どの学年もかなり落ち着いて生活している。

生徒同士、また、子どもたちと教師との関係が以前よりも良くなっている。

職員の信頼関係が高まってきている。

学校運営が以前よりも実質的により「民主的」になってきている。

(6) 研究推進委員会がしっかり機能し、全校の推進役になっている。

全校生徒のアンケートから

3月初めに全校生徒からアンケートをとりました。2つの結果だけ紹介します。

(1)「あなたは学び合い学習が学力を高めることに役立つと思いますか?」では、(どちらかと言うと)役立つと答えた生徒が、3年生で85%、2年生で84%でした。

(2)「あなたは学び合い学習が楽しく学ぶことに役立つと思いますか?」では、(どちらかと言うと)そう思うと答えた生徒が、3年生で85%、2年生で84%でした。

生徒たちの多くが学び合い学習(協同学習)の効果を実感していることがわかります。

今後の課題

(1) 教師が学びながら、この取り組みを続けていくこと。

(2) 下級生ほど学ぶ意欲がまだ低い実態の中で、それをふまえて授業を改善していく。(来年度の一年生もかなり厳しい実態らしい)。

(3)「共有の課題」とともに「背伸びとジャンプの課題」も意識した授業を心がけていく。

(4) 小学校や他の中学校との連携を模索していく。

(5) 生徒や保護者にも改革の主体者として参加してもらうための方法を探究する。

7. まとめとして

私の学校の場合は、学びの共同体づくりの「下からの改革」の例だと思います。実際には「下からの改革」よりも「上からの改革」(トップダウン)の例も多いのかと思います。

学びの共同体づくりの理念に関心を寄せ、学び、取り組もうとしているのが管理職である場合が少なくないからです。そのネットワークもあり、そうした人たちが佐藤氏の援助も受けながら、取り組みを実際に推進しています。

「下からの改革」が少ない理由は、組合活動を推進したり、民主教育を推進しようとする人々の中で、学びの共同体づくりの理念や佐藤氏の文献などがまだまだ注目されていなかったり、十分理解されていなかったりする実態があるからではないかと考えています。「下からの改革」はこうした人々こそが学び、実践を始め、職場に提起し、合意を広げていくときに開始され、進んでいくことになるのだと思います。

「一人のこどももつぶさない、一人の教師もつぶさない学校をどうつくるか」(佐藤学氏の講演より)という難題に挑戦する「学びの共同体」づくりの取り組みが、埼玉県内に大きく広がっていくことを強く願っています。